

19世紀と書記法研究

—ヒエログリフと漢字の関係を巡って¹⁾

小 野 文

Studies on the Writing System in the 19th Century

— Relationships between Hieroglyph and Chinese Characters.

ONO Aya

The present article examines the process of how Hieroglyphics and Chinese characters have been studied in parallel. The article includes the author's examination of how the perspective on relationships between Hieroglyphics Studies and Chinese Writing Studies was modified in the 19th century. To begin, we are going to outline several ideas of Sinologists on Egypt-China relation, that are formulated from the 17th century to the 19th century. Secondly, we will examine epistemological obstacles that prevented European Chinese Studies from facing the phonographical aspect of Chinese Writing. Lastly, we are going to analyze the development of Phonological Studies in the 19th century, and remark a similar tendency in Chinese Writing Studies in Europe.

はじめに

19世紀半ばにヨーロッパの中国語研究が迎える新たな局面については、幾つかの研究書がすでに記している²⁾。漢字と音声の関係に新たな光を投げ掛けることになったこの展開は、通常

1) 本論考を執筆するにあたり、関西大学文学部・内田慶市教授、アトランタ州エモリー大学人文科学部・Joachim Kurtz 準教授が、貴重な資料の閲覧を快諾してくださった。ここに記して感謝したい。

2) 例えば DeFrancis 1984, Alleton 1999.

ジョセフ＝マリー・カレリー（Joseph-Marie Callery 1810-1862）が作り出したとされる。カレリーは“phonétique”という新しい概念を創出することによって、現在「音符」（あるいは「声符」）と呼ばれている漢字の形が、音声と常に結びついていることを示そうとしたのである³⁾。その画期的な著作『中国語書記法の音的体系 *Systema phoneticum scripturae sinicae*』（以下 *Systema* と略記）の冒頭に、カレリーは次のように述べている。

象徴的記号のようにかつては考えられていたエジプトのヒエログリフのほとんどが音声的記号、すなわちことばの様々な音を再現するために用いられる記号にすぎないのだと、もし高名なシャンポリオンが証明していなかったら、私も弱々しい声をあげて学者の世界に向かい、中国語の漢字もまたそのほとんどがことばの音と結びついた音声的字にすぎず、これまで信じられていたように象徴的記号や表意記号ではないのだと、思いきって言うこともなかっただろう。しかし先入観の壁が破られたのだから、そして今やほとんど全ての科学において合理的な観察の仕方が採用されることになったのだから、私もあえて公衆の目前に、中国語の書き言葉がもつ音声体系についての私の研究の成果を披露しようと思う⁴⁾。

しかし学界を騒がせたシャンポリオンの発見は1822年、カレリーの著作の出版は、その約20年後の1841年である。実際に「ヒエログリフの音声による解説」という出来事が、中国語研究、特にその書記体系の解明に役立ったとすれば、この20年の遅れは何を意味しているのだろうか。

この問いを出発点として、以下に続く論考において検討されるのは、19世紀の書記法研究⁵⁾（特に中国語のそれ）において生じた質の変化である。この変化を単純に中国語研究における「音声重視の傾向」と片づけるべきではないだろう。この変化の背景には様々な思想の綴帳が重なり合っており、中国語研究史という限定された枠組みでは捉えきれない多層性が窺えるからだ。この背景を解明するには、書記法一般の研究史から光をあてる必要があり、さらには文

3) *Oxford English Dictionary* によれば、英単語の“phonetic”の名詞形が「漢字の音声を表す一部分」という意味を持つようになったのは、カレリーの *Encyclopedia of the Chinese language* (1842) からである。実際には、カレリーはすでに1841年の著作 (*Systema*) で “litteras phoneticas” という表現、あるいは “signes phonétiques” という表現を用いて、同じ概念を提示している。

4) Callery 1841, p. i.

5) 本論考では、écriture を書記法、lettres を文字、caractères chinois を漢字と訳出してある。

字と音声の関係についても考慮を加えるべきである。最初の問いを補強する形で、さらに二つの問いを掲げてみたい。一つは「ヒエログリフ解読と中国語の書記法研究の関係はどのようなものであったのか」、という問いである。こう問いかけることで、本論考の第一節はヒエログリフと漢字の結びつきのヴァリエーションと変容を追うことになる。ここでは、17世紀から19世紀にわたって漢字の形と音声が、どのような想像と思索の対象となってきたかという例を、幾つか取り出してみたい。第二節では、「19世紀の中国語研究において、文字と音との関係が焦点化されるのはなぜか」と問うことになる。この「なぜ」という問いには最終的な答えは与えられないものの、ヨーロッパの思想的背景を横断しながら、中国語の書記法研究が欧米において再び音声を取り戻す幾つかの契機を指摘してみたい。

1. エジプトと中国——声を失った姉妹

中国学、とくに研究史の分野では既知の事実だが、かつては中国とエジプトを様々な視点から結びつける試みが存在した。キルヒャー (Athanasius Kircher 1602-1680) からド・ギーニュ (Joseph de Guignes 1721-1800)、ポティエ (Guillaume Pauthier 1801-1873) を経て20世紀初頭まで、古代エジプトと古代中国の間に言語的・人種的・社会的類縁関係を見る途方もない想像は、発信者と受信者の双方から、学問的真摯さをもって受け止められてきたのである。このファンタスティックな類縁関係がほとんど唯一の土台にしていたのは、「表意文字 ideogramme」に代表される書記法である。図像を用いて概念を表現するという、アルファベット式書記法にはない「奇妙な」文字法を持っているというだけで、二つの文明が結びつけられていたと言えよう。この関係には、当初から捩れがあった。歴史的にはエジプトから象形文字が中国に伝わったと想像されていたにも拘わらず、学究的側面では、中国の書記法研究がヒエログリフ解読に先駆けて存在したからである⁶⁾。以下、考察の端緒として、この類縁関係の歴史を短く追ってみよう。

ヨーロッパにおける本格的なエジプト学は、アタナシウス・キルヒャーと共に始まると言わ

6) 書記法研究史の専門家であるダヴィッド (Madeleine V.-David) は、ある討論会で次のように述べている。「例えば解読の歴史は、中国語体系の学問的知識に関する議論なしには、語ることも理解することもできません。なぜなら、18世紀ヨーロッパの東洋学者にとっては、中国語の書記法は非アルファベット文字法の最初の経験だったからです。少しあとになると、当然のことながら、中国語体系の理論的知識はシャンポリオンが解読の際に用いた知識の一部となりました。ちなみにこの問題は、もっと早くからあったことです、というのも17世紀の初めに、宣教師たちによって記述された中国語の言語事実は、エジプトのヒエログリフの性質と機能（神秘的なものにせよ、合理的なものにせよ）に関する議論に大きな影響を及ぼしたからです」（強調は原著者）。Semaine internationale de synthèse 1963, p. 352.

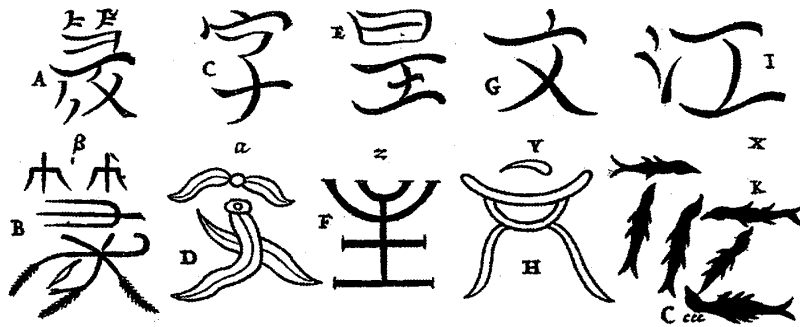


図1. キルヒャーによる漢字の成り立ちの説明

れる。誤った解釈をヒエログリフに与えたとはいえ、コプト語、アラビア語に通じたこの神父は、エジプト学とコプト語を結びつけるという重要な役割を果たしたからだ⁷⁾。彼はまた同じくエジプト学と中国学を結びつける

人物でもある。『支那図説誌 *China Illustrata*』(1667)において彼が描写する中国は、かの地への憧憬と幻想に満ちている。その中で彼が主張するところによれば、中国人はヒエログリフから文字体系を借りてきており、エジプト人が動物や植物などの図像から表意文字を作りあげるように、中国人も同じ方法を用いて漢字を作り上げたとされる(図1)。また『ノアの方舟 *Arca Noe*』(1675)においては、象形文字によって事物を表すという方法は、ノアの息子ハムによって中国にもたらされたとしている。このようにキルヒャーの想像のなかでは、古代エジプトから古代中国に向けて一つの道が歴史的に敷かれることになる。

ただしキルヒャーはエジプトの書記法と中国のそれとの間に差異を導入している。まずエジプト人は、会話のためにヒエログリフを用いず、むしろ隠れた力と機能を表すために用いたとキルヒャーは指摘する。さらに、ヒエログリフは何かの名前なのではなくて、ある観念集合の全体なのだとキルヒャーは言う。例えばスカラベの形は、スカラベを表しているだけでなく、物質的太陽、あるいはその他の「秘教的操作」を表しているのである。漢字にはそうした秘教的側面がない、とキルヒャーは見てとる。「こうした事柄全てが漢字には欠けているゆえ、あなたがある名称の音を見るときには、それが示されたものの全体であるのでそこには何の隠された神秘もない」⁸⁾。ここから彼の興味の対象は、部首を組み合わせる新しい漢字を作る可能

7) キルヒャーが精通していたのは中東の言語だけではない。博識多才で好奇心旺盛だったこのイエズス会士は、自由七科目に秀でていただけではなく、ダ・ヴィンチじみたアイデア(驚異の博物館、光の音響論、魔法のランタン等々)を実行に移す、遅れてきたルネサンス人であった。ヒエログリフのなかに象徴ばかりを読んでいた彼は、現在では笑い草にしかなりえない誤読を残しているが、これは中国語に関しても同じで、彼は漢字のなかに複雑な象徴しか読み取れないのであった。漢字の部首による分類に圧倒されたキルヒャーは、普遍言語の一典型として中国語を見ており、同じ見方は彼の弟子とも言うべきライブニッツや、この後に検討するフレレに大きな影響を残している。

8) Kircher 1987 [1677], p. 222.

性や、東アジアにおける漢字の普遍性に向けられることになる。

「音声化される文字に神秘性がありえない」とするキルヒヤーの意見は注目に値する。キルヒヤーにとって、ヒエログリフや漢字の価値は「表意的」という点にこそあるのであって、「表音的」側面は神秘性を損ない、隠れた力を失うものとされている。例えばある漢字一字がある音声を担当とすれば、それはその字が「象徴」や「暗示」ではなく、「語」を表していることを示す。それではアルファベットと同じで、何の神秘もないことになってしまう。普遍言語を追求するキルヒヤーにとっては、あくまで「操作可能な象徴」を持つ書記法が重要なのである⁹⁾。

ニコラ・フレレ (Nicolas Freret 1688-1749) は、ヒエログリフの「聖性」に関するキルヒヤーの議論を保持し、ヒエログリフは文字どおり聖なる銘記 (hiéro-glyphe) だが、漢字は多くの人が保持するゆえに「聖性」を失っていると考えた。碑文・文芸アカデミー会員として古代文明に関する幾つかの論考をなしたフレレは、シャンポリオンの時代のエジプト学にまで影響をもった人物である。中国学の分野ではフルモンのライバルとして知られ、フランスに渡ってきた中国人助手ホアンをフルモンに取られてからは、あからさまにライバルの中国語力を貶め、その学問的姿勢を批判する文章を残している¹⁰⁾。このフレレは、中国語の書記法と話し言葉を全く別のものとして捉えていた。「中国人ほど知識に富み礼儀正しい民族の話し言葉が、こんなにも貧しく粗雑なのは驚きである。というのも、書き言葉と比較して、中国の話し言葉が本当に野蛮だということでは意見が一致しているからだ」¹¹⁾ という彼の言が示すとおり、彼にとって研究に値する中国語とは書記法のことなのであって、話し言葉ではない。

フレレはヒエログリフと中国語書記法の比較を「書記技術の一般法則、とりわけ中国語の書

9) ウンベルト・エーコによれば、キルヒヤーは象形文字がアルファベットとして用いられるという考えをすでに持っていた。「ただ、象形文字は自然に存在するものを図示しているにちがいないという信念があるために、キルヒヤーは正しい道をつきとめることができない。象形文字と音声との短絡的な結びつきはすでに象形文字の表記法自体の内部にあって設定されていたものであったにもかかわらず、これをかれは後世の文明がおこなったことであるとする。そして、音声とそれを表象するアルファベット文字とをなんとかして区別しようとする。こうして、かれが最初に得ていた直観は、その後の時代における表音アルファベットの生成課程を説明するための鍵にはなっても、象形文字の本質が表音的なものであることを理解するための鍵にはならずにおわってしまう」(エーコ1995 [1993], p. 230)。

10) フレレのフルモン批判は、今日ではある程度まで理解できる。特に彼が「フルモンに注意するよう」プレマール神父に論しているような場合には尚更そうである。よく知られた事実であるが、プレマールは *Notitia* の原稿をフルモンに送って出版を依頼したにも関わらず、その原稿は故意に放置されたのだった。1735年のプレマール宛の手紙参照。Cf. Pinot 1932.

11) « Sur la langue chinoise », *Histoire de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, t. 5, 1720, p. 316 et s.

記法の基礎に関する省察」¹²⁾ において行っている。このアカデミーでの報告で、フレレはまずアルファベットに対立するところの「表象的書記法 *écriture représentative*」(と彼が呼ぶもの)の表現法を三種に分類している。一つは対象物の絵やイメージによって概念を表す仕方。二つ目は、非物質的な物事を象徴的なやりかたで、自然物の表象を用いて表す仕方。ヒエログリフにおいて「棒の先に置かれた開いた瞳」が「治国における慎重さ、あるいは世界を導く神慮」を表す、というのは、この種のやり方であるとフレレは言う。三番目は、意味される物事と記号(文字)のあいだに制度的な関係しかないような仕方である。エジプトのヒエログリフが前者二つの表現法を交互に用いているのに対し、中国語の書記法は三番目の表現法しか用いていないとフレレは指摘する。「中国の書記法の最初の発明者たちは、完全に恣意的な記号、あるいは意味される物事とのあいだに制度的な関係しか持たない記号に執着していた」¹³⁾。ここで言われている恣意的な記号とは、ソシュールの「記号の恣意性」議論とも、また「ノモス/ピュシス論争」に関わる議論とも別のものだ。西洋言語哲学が育んだこの二つの議論が、ことばの音声的側面を前提としているのに対し、フレレがここで触れている漢字の「恣意性」「制度性」の議論に音声は考慮されていない。彼がここで言おうとしているのは、漢字の形はヒエログリフの形よりも抽象化していて、対象物とは似つかない形になってしまっている、ということである。例えば「フクロウ」という概念を表すのに、エジプト人が実在のフクロウの図像(icon)を用いる(と考えられる)のに対し、中国語の漢字「梟」はすでに様式化されている、という議論なのである。音声的側面の無視は、フレレの次の文章からも明らかである。

これらの人々[中国人]のなかで、話し言葉の記号である文字を持つ口頭的な書記法を、どのようなやり方であれ知っている人はいない。漢字は、中国人が表現する概念の直接の記号である。この書記法は、まるで話し言葉の用法を知らない啞者によって発明されたかのごとくである¹⁴⁾。

この意見は、中国人の話し言葉と書き言葉が乖離している、という単純なものではない。フレレの意見を言い換えるなら、中国人が書いているものは、音声と結びつくようなことばの写しではなく、頭の中にある概念の写しだということだ。このフレレの驚くべき観察は、「広い中国で、話し言葉が全く違っても、書記法によって通じ合える事実」から引き出されている。中

12) Freret 1996 [1718] .

13) *Ibid.*, p. 58.

14) *Ibid.*, p. 53.

国語の書記法が、東アジアにおいて普遍的性質を持つのは、それが音声的ことばと切り離されており、未だ発話されていない概念と直結しているからだと言ふ。ここには、18世紀の普遍言語論争が色濃く反映されている¹⁵⁾。頭のなかに浮かぶ考えをそのまま記号で表現し、それで通じあえるならば、それは一種のユートピア言語である。ちょうどガリバー旅行記の中に出てくるラピュタ国バルニバービの住人たちが、言葉の代わりに物を差し出すように（例えば「リンゴ」と表現したいときに実際のリンゴを差し出すように）、フレレの想像のなかでは、中国人は「リンゴ」と表現したいときにはその記号（それはリンゴの絵ではなく、抽象化・様式化された文字である）を書くのである。彼の議論のなかで漢字という書記法は声を剥奪されている。

ここでのフレレの主張は、さきほど見たキルヒャーの意見（漢字は音声化されるゆえに神秘性がない）と正反対のように見えながら、実は同じ思考の表裏を成している。双方において、漢字における音声は、書記法のネガティブな部分を構成する。この思考の枠内では、漢字の形は意味あるいは概念と直結しているゆえに貴重で示唆的なものであり、音声と結びつくような記号の形は、否認と蔑視を受けている¹⁶⁾。

ジョセフ・ド・ギーニュの『中国はエジプトの植民地であることを証明する覚え書 *Mémoire dans lequel on prouve que les Chinois sont une colonie égyptienne*』（1759）¹⁷⁾において、エジプトと中国は植民地・被植民地の関係を持つに到る。この書の冒頭で、ド・ギーニュはこの関係を証拠だてる物件が「書記法」から来ていると表明している。「フェニキア、ヘブライ、エチオピア、そしてアラビアの文字の起源を検討した結果、中国の漢字は3つのフェニキア文字から成るモノグラム〔組み合わせ文字〕であること、そして漢字を読むと、フェニキア語あるいはエジプト語の音が出るということを私は証明する」¹⁸⁾。彼にとってこの発見は偶然がもたらしたものであった。当初彼はエジプトと中国の関わりを全く信じておらず、むしろ滑稽な考えと見なしていたからだ。ところが、「わたしはこのような考えでいたのだが、

15) アプリオリな哲学言語という、「フンボルト＝サピア＝ウォーフ仮説」の対極にあるようなフレレの考え方は、彼の時代には幅広く持たれている思想である。少なくともライプニッツやベーコンはこの思想を共有している。

16) ここでは「記号の形」と記したが、漢字の形状を指す。これとシニフィアンは、言うまでもなく別物である。付け加えるなら、我々は記号論における「漢字論」あるいは「書記法（エクリチュール）論」どころか、まだ基礎的な概念すら持っていない。しかしそのような考察は本論考の役割を大幅に超えるため、ここでは注記するに留めたい。

17) De Guignes 1759. この覚え書もまた碑文・文芸アカデミーでまず発表され、のちに縮小した形で出版された。

18) *Ibid.*, p. 5.

Pl. 54. **ALPHABETS PHENICIENS** Planche I
d'après les Inscriptions & les Médailles.

N ^o 1.	N ^o 2.	N ^o 3.	N ^o 4.
𐤀 𐤁 𐤂	𐤀 𐤁 𐤂	𐤀 𐤁 𐤂	Aleph
𐤃 𐤄	𐤃 𐤄	𐤃 𐤄	Beth
𐤅	𐤅	𐤅	Ghimel
𐤆	𐤆	𐤆 𐤇 𐤈	Daleth
𐤉	𐤉 𐤊 𐤋	𐤉	He
𐤌	𐤌	𐤌 *	Vau
𐤍	𐤍 *	𐤍 *	Zain
𐤎	𐤎	𐤎	Heth

図2. ド・ギーニュによるフェニキア文字の表。ド・ギーニュは第一列の形を「てへん」に似るとし、中国語においてもこの部首は最初に来る文字だとする。

ある日バルテルミ神父のフェニキア文字に関する覚え書を読んで、どのようにアルファベット文字ができ上がったのか調べてみようという気になった。私の目の前に、神父が見せてくれた正確なアルファベットをもつフェニキア文字があった。気晴らしに、私は古い形の漢字を含んだ中国語の辞書を見てみることにした。突然私はフェニキア文字の一つに似た形を認めて驚いた。私はまずこの関係に専念し、これを追った。そして多くの証拠が目前に現れたのに驚いた [...]」¹⁹⁾。ここからド・ギーニュが直接引き出す結論は極端である。「以上のことから、漢字、法律、政体、主権、その下の行政、そして帝国全ては、エジプト人のものだったのだと確信した。また中国の古代史はエジプトの歴史にほかならないことも [...]」²⁰⁾。

文字の形の近接から一気に飛躍して古代中国全てをエジプトの植民地とみる、矛盾の多いド・ギーニュの議論に関しては注釈のしようもないが、フェニキア文字と中国語を結びつける際の論旨には注意したい。まずド・ギーニュは、中国語の書記法と話し言葉の乖離に驚いている。前者が深い知性を示すのに対し、後者には知性のかけらも見当たらないからである。そこからド・ギーニュは、前者の書記法が「別の文明から来たのに違いない」と見当を付けている。中国語書記法の形と音は、フェニキア文字とほぼ同一である、というド・ギーニュの“発見”は、ここから生まれているのである。フェニキア語はエジプト・バビロニア地方で話されていた言語であり、バルテルミ神父の覚え書は、ド・ギーニュが言うように、フェニキア文字の表音性

19) *Ibid.*, pp. 36-37.

20) *Ibid.*, p. 36.

を主張するものだった。フェニキア文字と漢字が「形」においても「音」においても似ているということは、この二つが歴史的にエジプト起源であることを証明するとド・ギーニュは想定している。彼はまた、「ある民族が何世紀もの間、自分たちの知らない言語を用いている」ことに驚かせてみせている。

アベル＝レミュザ (Jean-Pierre Abel-Rémusat 1788-1832) はこの競演に加わらないのだろうか。19世紀初頭の東洋学者として、書記体系に関する議論には彼にも十分参加権があったはずだ。フランス中国学の父とも言えるレミュザは、19世紀前半に早世するが、19世紀を通して中国学に影響を持ち続けた人物である。彼は東洋語学校においてシャンポリオンと同学で、シャンポリオンが彼の発見を碑文・文芸アカデミーで読み上げた際には、その場に列席していた一人でもあった。シャンポリオンの発見の前年、1821年にレミュザは「エジプトのヒエログリフについて」²¹⁾「中国語の書記体系の基礎となった象形文字について」²²⁾ という二つの論考を上梓している。特に前者は、レミュザがこの二つの書記法研究を比較している点で興味深い。この中でレミュザは、ヒエログリフ研究の「想像に基づく推論」を批判し、コプト語研究と資料蒐集を称揚している。そして中国語との関係に関しては、次のように述べる。

中国語研究もまた、[ヒエログリフ解説に] 非常に有益なものと私には思える。しかしそれが哲学的で明瞭なものであるよう、また中国語において似たような形のものがあるものを意味しているから、エジプトの形象がそれを意味しているといったような、問題になるような考えを起こさないようにと願っている。中国語の知識は正しい知性には有利に働くことだろう。それは、どのようにしてある民族が、アルファベット式書記法を捨てて象形的書記法を取ったのかを示してくれるだろう。同じ点から出発して同じ道をとった二つの国民は、もし全く交通や相互の影響がなかったとしても、ときに出会うことがある。どのような状況で、書記法が必然的に原始的对象から身をひきはなし、音の表現に適應されるようになったのか？ どの程度まで、文法手段の発展と対応するのか？ [...] こうした問い、そして他にも多くの問いが、中国の古文書学を深く学ぶことで答えを与えられるだろうし、それはヒエログリフの解説にも有益な情報だろう²³⁾。

レミュザはここで、ヒエログリフと漢字が持つ本質、すなわち複数の体系からなる書記法とい

21) Rémusat 1821a.

22) Rémusat 1821b.

23) Rémusat 1821a, p. 343.

う性格を見極める寸前まで行っているように見える。しかし彼が「どのような状況で、書記法が [...] 音の表現に適応されるようになったのか？」と問うとき、彼はヒエログリフが「音声」を表しうることを示唆しているのだろうか。ここではそう言い切れない。「音の表現」は、ここでは単に「語」を意味しているにすぎないからだ。中国古典の研究家であったレミュザにとって、中国語とはとりわけ「書かれた」ものであり、『漢文啓蒙 *Eléments de la grammaire chinoise*』の第1ページに自ら宣言するように、「その書記法の記号は発音を表すものではなく、思考を表すもの」²⁴⁾であった。ある漢字が「読まれる」とすれば、それはその漢字が表している概念（あるいは語）が音声と結びついているのであって、漢字の形と音声に必然的な絆はない、というのがレミュザの基本的な態度である。合理主義者であるレミュザは、ヒエログリフの諸記号が象徴や寓話であるという解釈を否定するが、その代わりに彼が採用しているのは、そうした記号が「概念（あるいは語）」を表現しているという考えであって、ヒエログリフの記号がアルファベット風に音声的価値を表しているという考えの闕には、足を踏み入れていると言えらるだろう。その証拠に、レミュザは衝撃的なシャンポリオンの発見に対して注を加え、ヒエログリフの音声法則は、比較的少ない数の記号にしかあてはまらないのだと主張している²⁵⁾。

カレリーの同時代人であり、1842年に『シニコ＝エジプトアカ：中国とエジプトの象形文字の起源と形成 *Sinico-Ægyptiaca*』²⁶⁾という本を上梓するピエール＝ギヨーム・ポティエ (Pierre-Guillaume Pauthier 1801-1873) は、これまでの「ヒエログリフ／漢字」の関係を変容させている。中国学者であるポティエは、やはり象形文字に魅かれてエジプト学を齎る学者の一人である。ポティエがこの著作を出版する1842年の段階になると、すでにヒエログリフが音声的側面を持つことは自明のこととして受け取られている。またポティエはカレリーの *Systema* から多いに啓発されて、漢字の音声的側面に注目している。このような時代の流れのなか、無邪気にヒエログリフと漢字の「形の相似」を主張するわけにはいかない。ポティエはヒエログリフと漢字を共に「表意＝表音文字 *idéo-phonétique*」とする。つまり、二つの文字体系は「意味」も「音声」も同時に担うものとして捉えるのである。彼の議論は、この点でこれまで見た「エジプト＝中国同一起源説」をとる論者たちとは大きく異なる。

これまで見てきたような中国語の書記法とヒエログリフの書記法の相似を見て、人は一

24) Rémusat 1857 [1822], p. 1.

25) Rémusat 1821b, p. 43.

26) Pauthier 1842.







1.  **AMN**, *Amn* 'Amon ou Ammon-DIEU.
2.  **HCE**, *Ice-DÉESSE*, c'est-à-dire, déesse-Isis.
3.  **CN**, *Cn*, *çon-HOMME*, c'est-à-dire, frère.
4.  **CN**, **T**, *Cn ti*, *çon-ti-FEMME*, c'est-à-dire, sœur. La même idée est représentée en chinois par la même formation idéo-phonétique, en plaçant à côté de la figure générique *femme* 女 le groupe phonétique 且 *tsièi*, ce qui donne le composé 姐 *FEMME-tsièi*, ou sœur (cl. 38). Dans ces exemples, les groupes phonétiques représentent les mots de la langue parlée qui exprimoient sœur, frère, etc.
9.  **OYT**, *Ocht-ARBRE*, c'est-à-dire, persée.
10.  **CYNIN**, *Schin-FLEUR* OU PLANTE, c'est-à-dire, lotus. En chinois, le lotus porte aussi le nom de FLEUR-lian.

図3. ポティエによるヒエログリフと漢字の比較

方がもう一方を生み出したと想定するかもしれない。しかしこのような事実を正当化するようなものは何もない。我々が考えるに、この二つの書記法は同じ原理、すなわち対象の形の表象という原理から発しているが、場所と時間の状況に応じて、似たような様々な手段を通して同じ結果にたどり着いたに違いない。この事実は人間精神の一般的法則に因っているのもであって、それはナイル流域で現れたのと同じように、黄河流域で現れたのである²⁷⁾。

上記の引用からはっきりするように、エジプトはもはや中国文明の源泉ではない。両者は「人間精神の一般的法則」から、対象物を表象する文字を作り出した、とされる。中国とエジプトのあいだの歴史的関係はここで壊される。新たに生まれてくる関係は、類似的関係と呼べるだろうか。一般的法則に対する関心が、歴史的関心を凌駕するのである。

この『シニコ=エジプティアカ』で二つの書記法がどのように比較されているのか、もう少し詳細に見ておくことにしよう。図3に示されている項目4において、ポティエは幾つかのヒエログリフの単語と漢字を並べてその形成を説明している。ここではヒエログリフの「形」が漢字の「形」に似ているといった、キルヒャー以来の議論はもはや現れていない。代わりに登場しているのは、それぞれの単語がどのような意味の記号から複合的に構成されているかの分析である。例えば項目4でポティエはヒエログリフの記号を記した後、これが“CN, T”という音声、すなわちコプト語の“çon-ti” (tiは女性を表す) を意味しているとし、「姉(あるいは妹)」という訳語を与える。そして彼は次のように付け加えている。

同じ概念は、中国語においても同じ表意=表音的 (ideo-phonétique) 形成によって表象されており、女性の部首を表す「女」の横に、音形グループ「且twièi」を置くことで、

27) *Ibid.*, p. 106.

複合文字「姐」(女-twiei) すなわち「姉」が得られる²⁸⁾。

ここで問題になっているのは、意味を限定する限定符と音声と確定する記号の結合の仕方である。この議論は、すでにヒエログリフと漢字が複数の表記法を混合した体系であることを前提としている。この点では、ポティエの論はシャンポリオンの発見を十分に反映している。しかし別の視点から見れば、彼が問題にしているのは複数の概念の結合の仕方である。もう少し後で見るように、これは普遍言語探求者が中国語において最も注目した点である。そしてこの普遍言語探求は、ヨーロッパの中国語研究を長い間その影響下においていたのである。

*

* *

以上の人物リストは幾らでも長くなりうる。しかし我々の目的はパノラマ的な目録を作ることではなく、エジプトと中国が書記法研究において結びついてきた、その関係の質を問うことであった。これまでの予備的考察から、中国とエジプトの書記法の結びつきを考えるうえで、二つの原理と二つの関係付けが見えてくる。二つの原理とは、文字の形と概念の結びつきをa) 形と意味の関係から捉える方法、b) 形と音の関係から捉える方法、である。今日では前者を形態素文字法 (morphographie)、後者を表音文字法 (phonographie) と呼んでいる。シャンポリオンの発見とは、ヒエログリフ解読の際のaからbへの変換 (あるいはaからabへの変換) だった。一方、二つの関係付けとは、ヒエログリフと漢字の関係を1) 類似的に捉えるか、2) 歴史的に捉えるか、である。キルヒャーやド・ギーニュは、2) の見方を取っていた。二つの国の歴史は繋がっている (あるいは中国がエジプトを継承している) と捉えていたからである。一方ポティエにおいては2) の見方はすっかり消滅し、ヒエログリフと漢字を類似的に捉える見方のみが有効である。ただしポティエが「概念の結合法」という点に類似関係を見ていることに注意を向けておこう。ライブニッツを魅了したこの結合法は、二つの書記法を長く結びつける原因となったからだ。

シャンポリオンがヒエログリフの大きな原理をaからbと読み替え、カレリーもそれにならって漢字の体系原理をaからbの視点に移したとすれば、この移行はエジプトと中国の書記法の間を「歴史的」なものから「類似的」なものに捉え直す動きと平行している。そもそも、

²⁸⁾ *Ibid.*, p. 105.

ヒエログリフと漢字の結びつきは、両者の形が似ていると西洋人に感じられたことから始まった。その際に、より図像的要素が強い（従ってより神秘的な）と考えられたヒエログリフの方が、漢字よりも古いと思われたため、「エジプト→中国」という歴史的な移行が想定されたのだった。もしヒエログリフが表意的でないとするれば、つまり「足」の形が足という意味を表すのではなく、単に「B」の音を表すのだとするれば、同じような形を持つ漢字（そして漢字は表意文字だと捉えられているのだから、足の意味を表す漢字）との接続は、いったん切断される。古代エジプトと古代中国の関係は消滅し、単に「非＝アルファベット」であるという共通点を持つだけの比較関係になってしまう。

ここでようやく、最初に発した問いの一つに戻ることができる。それは、「ヒエログリフの音声による解説」という出来事が、カレリーによる中国語の書記法解明の一展開に役立ったとするれば、なぜ20年の遅れが出たのか、という問いである。この遅れは、逆説的にも、「音声による解説」、つまり音声原理をヒエログリフに認めたことから生じている。シャンポリオンがヒエログリフを「形＝意味」ではなく、「形＝音声」と捉え始めた時から、エジプトと中国を結ぶ絆はいったん切れてしまったのだ。相も変わらず、中国学者は漢字を部首によって分類し、またその表意性を強調していたからである。それがカレリーによって再び結ばれ、「漢字もヒエログリフと同じように音声的である」という主張がなされるためには、エジプト／中国の関係は、歴史的な類縁関係から抜け出て、別の関係に入らなければならない²⁹⁾。そのためには、漢字という書記法もまた表音的体系を持っているのだという認識が、中国学者に分け持たれる必要があった。しかし、この自明にみえる認識は、はたしてどのように覆い隠されていたのだろうか？

2. 文字と音声

1) ヒエログリフの表音性の“発見”

ここで一度、シャンポリオンの発見とはどのような類いのものだったのかを問うてみたい。

シャンポリオンの伝記を書いたジャン・ラクチュールは、トマス・ヤングとシャンポリオンの熾烈な闘い——どちらが先にヒエログリフを解説するか——の経緯に一章を割いている³⁰⁾。この二人のどちらに「解説者」の称号を与えるのかという問題に関しては、イギリスとフランスで、また解釈者によって、意見が分かれてきた。というのもヤングは解説の一手手前までは

29) 我々はこれを「類似的analogique」な関係と名付けておいた。この「analogique」という概念については稿を移してより詳細に検討する必要がある。

30) ラクチュール 2005 [1988]。

進んでいたのであるし、シャンポリオンも、ヤングとその先駆者の発表から多くを得ているからだ。実際、19世紀の初頭には、フランス、イギリスを始めとするヨーロッパの東洋学者たちは全て解読作業に関わっていたといっても過言ではない。言語学の素養のないアマチュアも交えて、しのぎを削る解読競争が始まっていたのだった。

19世紀初頭、スウェーデン人ヨハン・ダヴィッド・オケルブラッドは、シルベストル・ド・サシに続いて、エジプトの民衆文字（デモティック）がアルファベット式記号を用いていることを証明していた。シャンポリオンとの友好的な文通を交わしながらも、オケルブラッドは彼の仕事を受け継いでくれる者として、イギリス人のトマス・ヤング（Thomas Young 1773-1829）を指名していた。

トマス・ヤングは先人の功績を用いて研究を効果的に進めたイギリス人物理学者である。すでにバルテルミヤド・ギーニュが、「カルトゥーシュの内部では固有名詞の音が表されている」という説を唱えてはいたが、ヤングはこれを明確にしてみせたと言える。言語学的知識が欠如していたにも拘わらず、数学的直観によってヤングは多くの推定を打ち立てる。シャンポリオンより何年も前に解読の鍵石であったロゼッタ石^{キーストーン}を検討する機会を得ていた彼は、まず民衆文字の解読から始める。幾つかの回り道の後に、再びヒエログリフに戻ったヤングは、カルトゥーシュの中の固有名「プトレマイオス」「ベレニケ」に音価を当てはめることに成功する。しかしながら、ヒエログリフの「表音性」に気付き、解読の一手手前まで行きつつも、ヤングは最後の敷居を超えることはできていない。彼はカルトゥーシュの中の外国人名のみが音声を表していると思っていたからだ。その他の大部分の文字は象徴的な意味を持っているという思い込みから逃れることはできなかったのである。また言語学的知識を持たなかった彼は、カルトゥーシュの人名を読む際にも、それが子音のみを表しているという可能性に気付くことはなかった。一言でいえば、彼の「解読」には体系が欠けていた。

シャンポリオンが発見したのは、この解読体系であり、説明であったとすることができる。1822年の発見にいたるまでの彼の幾つもの発表が示しているように、何年もの間、彼はヒエログリフの本質が表意的なものなのか、表音的なものなのかの間で揺れていた。彼が確信を得ることになる契機は、1921年の彼の誕生日に訪れる。この日に彼は思いついてロゼッタ石の特定部分のヒエログリフの記号の数と、対応するギリシャ語の「語」の数とを比べてみたのである。ヒエログリフの記号の数（1419個、166種）は、ギリシャ語の「語」の数（486個）より圧倒的に多かった。ここから「ヒエログリフが全面的に表意的だとは言えない」ことをシャンポリオンは確信する。最終的に彼が見出したのは、ヒエログリフの文字体系が複合的——すなわち「絵画的・象徴的・音声的」なものであること、そしてこの中でも「音声」の占める位置が大

きいということであった。言い伝えによれば、シャンポリオンはこの発見を兄に報告したのち失神し、数日間意識が戻らなかったという。

シャンポリオンやその先駆者たちが、何年もの間、いや何十年もの間³¹⁾、ある程度まで気付いていながら確信を持つに到らなかった事実——これこそがヒエログリフ書記法の表音性であった。ヒエログリフはあまりにも長い間、象徴と寓話を表している記号という神話を形成していたため、ここから脱するためには長い逡巡を要したのである。

2) 漢字の場合——隠蔽される表音性

エジプトのヒエログリフが長い間、一つの神話を形成していたとするなら、それは漢字に関しても同じである。ヒエログリフの例に見るように、書記法の図像的・象徴的側面が、記号と音声の関係を見えにくくする認識論的遮断を作り成していたと考えるべきだろう。ことに中国語に関しては、長い間「書記法」と「言語」が同一視されていた恐れがある。ヨーロッパにおいて中国語を勉強するとは、ある時期まで書記法すなわち「漢字」を勉強することであったのであり、特に知識人に重要視されたのは、部首による分類・象徴の複合的集合による新概念の創出であった。この漢字への過度の注目は、「話し言葉」ひいては音声的側面の軽視を引き起こすことになる。中国に渡った宣教師たちの報告書の中でヨーロッパ知識人の関心を強く引いたのは、「漢字」が中国帝国全土、そしてそれ以外の周辺諸国でも通用するという事実であった。音声的側面を考慮しなければ、漢字は東アジアの共通言語であるという観察は、中国においては「書記法すなわち言語」であるという思い込みを助長したのである。

フンボルト (Wilhelm von Humboldt 1767-1835) は19世紀初頭に、漢字の形と概念の結びつきのみに魅入られていた東洋学者たちに注意をうながしている。「私が思うに、中国語は話されている言語だということをほとんど忘れようとしている学者たちは、あまりに書記法の影響を強調するあまり、いうなれば書記法を言語 (langue) と置き換えてしまったのだ」³²⁾。またフンボルトより少し後には、デュ・ポンソー (Peter Du Ponceau 1760-1844) が『中国語の書記体系』(1838)において次のように述べている。「漢字は、他のどんな書記体系と比べても、語の正しい意味でのことば (a language) を作り為しているわけではない。まったく象徴的にそのように呼ばれるだけであって、それは我々のアルファベットの文字から成るグループに関しても同様である。我々は文字を読むわけではない。我々は、ああした小さい記号のグループ

31) エーコの指摘通り、キルヒャーが既にこの直観を得ていたとすれば、実に百年余の間の躊躇だと言える。

32) Humboldt 1999 [1827], p. 172.

によって読むのであって、それらは語や文を表象しているのである」³³⁾。この二人の洞察に満ちた主張から逆に照射されるように、19世紀初頭までは、中国語といえば「漢字」のことであり、その書記法は表意的だという説が暗黙の了解を受けていたのである。

実際、アベル＝レミュザの時代までは、中国語の話し言葉はほとんど研究の対象となりえないものであった。レミュザ自身も次のように「話し言葉」と「書き言葉」の違いを述べている。

最初のもの〔話し言葉〕は、内容に乏しく不完全なものであるが、これはかろうじて文明化された部族の言語である。この言語はつねに繰り返される少数の音から成り、耳を疲れさせる。この言葉は、もしそれを話す人々の中にいれば、他の言語と同じように数ヶ月で学習できる。もう一つのもの〔書き言葉〕は、表現が豊かで文人の要請に従って形作られたものだが、思想家たちの共同体の知の道具として用いられる。この言葉は多数の象徴からなるが、この象徴の組み合わせは無限で、多かれ少なかれ深められた研究の度合いに応じて、知性と想像力を満足させるものである³⁴⁾。

すでにフレレも同じような考えを提示していたのを我々は見た。ヨーロッパの知識人にとって、中国語の話し言葉は耳障りで野蛮な言葉であり、研究には値しない。18-19世紀のインド研究において、古代サンスクリット研究が称揚され、「現在の」インドという対象、またその諸言語が軽視されていたのと同じような扱いを、中国語も受けていたのだと見ることができる。ヒエログリフ研究との関連で検討したように、「話し言葉」の音声は、象徴文字の神秘性の対極にあるものと見なされていた。キルヒヤーがいみじくも表明しているように、「音声化されるものに神秘性はない」。彼とその後継者にとっては、象形文字の神秘性こそがキリスト教の奥義と繋がりを持ちえるのである。

「部首による漢字の分類」も漢字の音声的側面の軽視を作り出している。この部首分類は、普遍言語探求という、数世紀にわたって西洋言語哲学の一支流をなしていた思想に組み込まれ、一時そこに安住の地を見出していたと言えよう。キルヒヤー、ライプニッツ、ヴィーコ、ベーコン、フレレといった哲学者・思想家たちが、中国語を一種の哲学言語と見なしたのは、部首による分類を概念による分類と捉え、漢字の部首の組み合わせによって普遍的な概念操作が可能と考えたからであった。フレレについて上述した際に触れたように、これらの思想家が

33) Du Ponceau 1838, p. x. 強調は原著者。

34) Rémusat 1826, p. 128.

ほとんど共通して持っていた表意文字に関する認識とは、漢字が「言葉による言語に媒介されず、直接頭のなかにある概念を表す」というものだった。この考え方は長い間、中国語研究者をも支配している。中国語の音声を丹念に記したプレマール (Joseph de Premare 1666-1736) でさえ、漢字の「形」と「音」を関連付けることをしていない。

試みにプレマールの文法書を開いてみよう。18世紀前半に書かれ、長い間ないがしろにされてきた *Notitia Linguae Sinicae* には、丁寧な音声記述が記されている。「漢字は音声を伴ったある概念を表す」という考え方は、プレマール以前も以後も、中国学者に分けもたれていた考えのはずである。音声転写の仕方に幾つかのヴァリエーションがあったとはいえ、来華宣教師たちは音声を漢字と一緒に書きとめ、ヨーロッパの中国学者はそれを目にしていたのだから。しかし我々は、プレマールもまた、漢字の形にありもしない象徴を読んでいたことを知っている。彼も「漢字の形は隠された意味を持っている」と考える象徴主義者の一人だったのである³⁵⁾。ここで我々が気付かされるのは、「漢字は音声を伴ったある概念を表す」という考え方と、「漢字の形自体も音声を表記している」と考えることは別物である、ということだ。従ってカレリーが *Systema* の中で「思い切った試み」と称しているのは、「中国語の音声的記述」という、既に為されていた作業ではなく、「音」と結びついた「形」を漢字体系のなかに見出し、それに “phonétique” という名を付けたことにあったといえる。

このカレリーの *Systema* に影響を受けて、19世紀中葉のフランスの中国学者ルイ・バザン (Louis Bazin 1799-1863) は、部首分類の他に音符分類を文法書のなかで試みている。またレミュザのような「古文ばかりを追い」「中国語のうちに表意文字しか見出していない」学者たちを批判し、「中国語の口語」を書記法とともに学ぶことを提唱する³⁶⁾。この時期になると、「文字称揚派」に変わって「音声派」が台頭してくる。この「新旧論争」では、近代派が圧倒的に有利である。一つには、中国本土の事情が近代派に有利に働いている。19世紀の半ばによ

35) ブヴェ (Joachim Bouvet 1656-1730) に続いて「中国の象徴主義者 China figurist」と呼ばれたプレマールは、漢字のなかに、また特に『易経』のなかに、キリストの教えを「読み取って」いた。典型的な例を一つ挙げるとすれば、『易経』の「易」の字を、プレマールは「イエス・キリスト」を表すものと見ていた。「易」の字は、「日」と「勿」から成っており、これはプレマールによれば、神と人を意味する。二つが合わさった字である「易」は、神であり同時に人であるところのイエスを表している、というのが彼の説である。「中国の象徴主義」が知識人に与えた影響については Pinot 1971 [1932]、プレマールと象徴主義については、Lundbæk 1991を参照のこと。

36) しかしバザンは漢字とアルファベットを対応させようとするあまり、行き過ぎた分析も行っている。例えば彼は、民衆の書記法は完全に表音的だと断言している。バザンによれば、彼らは当て字のように漢字を音声に当てているだけで、その意味には全く注意を払っていない。

24

METHOD OF PLACING THE VOWELS.

VOWELS FOLLOWING CONSONANTS.

	e	a	ah	au	uh	o	oo
P	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘
T							
CH	/	/	/	/	/	/	/
K	—	—	—	—	—	—	—
F	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒
TH	(((((((
S)))))))
SH	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒
L	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒
R	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘
M	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒
N	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒

VOWELS PRECEDING CONSONANTS.

T							
M	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒	⌒

図4. エリスとピットマンの発音表

けでなく、商人や外交官・軍人たちが宣教・交易・外交・支配の目的で、徐々に中国に入植しはじめるからである。彼らのために多くの会話集が編まれた事実からしても、欧米の中国研究の方向が変化せざるをえなかったことは十分窺える。一方で、中国帝国内においても、各地方から一つの国家語としての官話への集約が推し進められている。南方官話、北方官話、京話、地方方言という数多くのヴァリエーションに富んだ音声、外からの視線をあびる中で次第に一つに定まていく過程は、19世紀後半に入って加速化している。このように中国の内側からも、共通語の認識が変わりつつあったことは確かである。このような背景にあって、ヨーロッパの中国語研究が「話し言葉」に、そしてより一般には中国語の音声的側面に注意を払うようになってきたのは当然とも言える。

しかし我々はここでもう一度、ヨーロッパの書記法研究と音声の問題に戻ってみたい。中国側の変化の影響からというだけでなく、19世紀の言語研究そのものにも、音声への偏愛が生まれてくるからだ。それはアルファベット式書記法から一歩距離を置く、という形で現れる。

19世紀に入って急速に発展する音声研究は、書記法研究をある意味で凌駕していく存在である。一般的に欧米の音声研究は、スウィート (Henry Sweet 1845-1912) やジーファース (Eduard Sievers 1850-1932) が19世紀後半に発展させたものと考えられている。「音声の科学的な記述」という点ではそれが正しいのであろう。しかし一方で、アルファベット書記体系と音声の関係、そのズレについては、それ以前から考察の対象となってきた。ここには二つの方向が認められる。一つは、非アルファベット言語にアルファベット表記を与えようとする試みである。すでに18世紀末に、ウィリアム・ジョーンズ (Sir Williams Jones 1746-1794) がアジ

ア諸言語について同じような主張を行っているが、東洋学者かつ哲学者であったヴォルネイ (Constantin-François Chassebœuf, comte Volney 1757-1820) も、1819年に「アジア諸言語に適應するヨーロッパ的アルファベット」を發表し、アルファベットによって「簡便に」アジア諸言語を学ぶ利点を上げている³⁷⁾。もう一つの方向は、エリス (Alexander Ellis 1814-1890) やピットマン (Isaac Pitman 1813-1897) という言語学者たちが「音の書記法 Writing of sounds」と題してフォノグラフィー (Phonography) あるいは速記術なるものを考え出すように、音を書記法に当てはめて、新しい音声記号＝アルファベット (図4参照) を作り出そうとする動きであって、これも19世紀に入って徐々に加速化している。

綴り字改良問題と普遍的音声記号の体系構築の問題は、19世紀後半に入るまでは、同一の問題として論じられている。これは故無きことではない。この二つの方向性は、ある意味で、普遍言語探求と関わりを断ち切っていないからだ。前者の方向はローマン・アルファベットという一つの音声的書記法をアジアの諸言語にあてはめようとする点で、そして後者は「唯一の音声表記」を作り出そうとしている点で、この二つの方向性は普遍言語探求の傍系とも言えるのである。そういった意味では、普遍言語探求の枠組みのなかでも、図像から音声へ、というシフトが観察できると言えよう³⁸⁾。「ある図像が普遍的にある概念を表しうる」という考えが、ある音声記述があらゆる言語に応用できる、という考えに移行していく。この際、西洋のアルファベットが基準となって正確な音声記述が打ち立てられ、それが別の書記法を持つアジア諸言語に応用される、という展開に違和感を持つものはいない。

小 結

19世紀の書記法研究について、書記法研究史家のダヴィッドは次のように言っている。

19世紀の思考においては、言語の諸事実に対する非常に偏った称揚（ヘルダーによって始められた）のあとに、ある空隙が生じたということは確かです。逆説的にも、解読の大世紀は、諸記号の問題に対して興味を喪失し、こうした解読の前にあった長い予備的考察を

37) この際、ヴォルネイが提言しているのは、簡便にアジア諸言語を学んで、それを交易に利用しようということである。中国においては、特にウィリアムズ (Wells-Williams) がこの運動の主唱者となる。

38) 実際19世紀に入ると、音声や音楽によって普遍的な言語を創作しようとする試みが幾つも現れている。代表的なものは、ド・ヴィスムの『パシロジー、あるいは普遍言語と考えられる音楽について』(1806)、スードルの「ソレソ」(『普遍音楽言語』、1827) である。こうした試みは、例えばエリスやピットマンの Phonography で披露される体系と、ごく僅かな相違しかない。ただ前者の普遍言語探究者は、しばしば自国語に当てはまることがすなわち諸言語に当てはまることだと推論している場合が多い。

一掃してしまいました。記号の問題が、ベーコンからコンディヤックにいたる哲学の主要な問題の一つであったのにも拘わらず、です³⁹⁾。

ダヴィッドがここで語っている、19世紀に生じたとされる空隙——これは、エジプトと中国の結びつきが切断される動きと対をなしている。二つの書記法が神秘性を失い、二つの文化を結んでいたと思われる歴史的類縁関係が消えたときに、おそらく書記法研究一般も大きな転機を迎えたのだろう。それはこれまでの普遍言語探求の歴史、特に表意文字の象徴性探求の歴史を切り捨てる方向であったに違いない。より「科学的」で「体系的」な解説を目指して、また書記法一般の類型論を目指して、書記法研究は「形」の奥に神秘的な真理を求める探求と縁を切る。それと同時に、記号の「形」に重しのように乗せられていたあらゆる象徴・寓話・図像解説の試みは忘れ去られ、代わりに「音声」と「文法機能」が付加されるようになる。

中国語の書記法に、その中の一字一字に、「唯一の音声」を与えていこうという試みもまた、この流れに逆らうものではない。そしてここには極めて政治的な意図が見え隠れする。漢字の表音性を強調しようとするヨーロッパ中国学の動きは、すでに述べた「中国の開国」の言語文化事情とぴったり一致しているからだ。中国との交易や宣教という、純粋にプラクティカルな目的のみから欧米人の中国語研究が音声面に目を向ける、と考えるのはナイーヴにすぎるだろう。この根底にあるのは、ある一国を支配することであり、その一つの方策として、かの言語に一つの音声体系を与えるという動きがありうる。それは書記法の文字の構成要素の中に音声的側面を認める、という方向と矛盾せず、むしろそれを促進させている。

中国語の書記法は、ヒエログリフと共に「生産的な神話」⁴⁰⁾であった。ヒエログリフから発したと考えられ、また普遍言語を体現するものだと捉えられてきた漢字は、長い間「声のない言語」と同一化されてきたのを我々は見た。19世紀になって漢字の形と音声の関係が注目され、また中国語の「話し言葉」研究が実際に必要とされるに到って、中国語研究はいわばこれまでの「ヨーロッパ諸言語研究」と同じような研究対象として、先入観や想像から逃れたかのように見える。それは一面からすれば、中国語が脱神話化し、科学的言説に組み込まれるようになったと言えるのかもしれない。しかし漢字の象徴性に神秘を見出し、新概念の形成力に普遍性を見ていた思索家たちと、漢字に唯一の音声、また唯一のアルファベット表記を与えていこうとする19世紀の学者たちは、どこかで呼応している。音声もまた、それが起源のものであれ、

39) « Confrontation et conclusion », Semaine internationale de synthèse 1963, pp. 352-353.

40) ミュリエル・デトリの表現。Cf. Détrie 1997.

現在のものであれ、「あらかじめ失われた、到達不可能なもの」であることには違いがないからだ。漢字の形に象徴的意味を付けていったキルヒヤーと同じように、しかし科学の装いをもって、漢字の形に音声を付けていった学者たちもまた、そのようなものに魅惑されていなかったとは言いきれないだろう。

〈付記：本論考は文部科学省平成18年度科学研究補助金（若手研究スタートアップ）「言語学における概念形成の研究～東洋学から一般言語学への影響～」(課題番号18820047)による研究成果の一部である〉

参考引用文献

(再版・翻訳を引用したものに関しては、[] 内に原著の初版の年号を入れた)

〈和文〉

- ウンベルト・エーコ 1995 [1993]、『完全言語の探求』（上村忠男・廣石正和訳）、平凡社。
 ジョスリン・ゴドウィン 1986 [1979]、『キルヒヤーの世界図鑑』（川島昭夫訳）、工作舎。
 ジャン・ラクチュール 2005 [1988]、『シャンポリオン伝』上下巻（矢島文夫ほか訳）、河出書房新社。
 矢島文夫 1999、『解説古代文字』、ちくま学芸文庫。

〈欧文〉

- Viviane Alleton, 1999, « L'oubli de la langue et l'〈invention〉 de l'écriture chinoise en Europe », *Etudes chinoises*, vol. XIII, n°1-2, pp. 259-281.
 Madeleine V.-David, 1965, *Le débat sur les écritures et l'hiéroglyphe aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Paris, S.E.V.P.E.N.
 John DeFrancis, 1984, *The Chinese Language — Fact and Fantasy*, Honolulu, University of Hawaii Press.
 Muriel Détrie, 1997, « L'écriture chinoise en Occident : un mythe productif », in Mabel Lee & Meng Hua (eds), *Cultural Dialogue and Misreading*, Hawaii, University of Hawaii Press, pp. 204-215.
 Peter S. DuPonceau, 1838, *Dissertation on the Nature and Character of the Chinese Système of Writing*, Philadelphia, M'carty and Davis.
 Nicolas Freret, 1996 [1718], « Réflexions sur les principes généraux de l'art d'écrire et en particulier sur les fondements de l'écriture chinoise », now in N. Freret, 1996, *Mémoires académiques*, Paris, Fayard, pp. 39-72.
 Wilhelm von Humboldt, 1999 [1827], « Lettre à M. Abel-Rémusat sur la nature des formes grammaticales en général et sur le génie de la langue chinoise en particulier », now in Rousseau et Thouard, 1999, pp. 125-179.
 Athanasius Kircher, 1987 [1677], *China illustrata* (English version translated from the Latin by Charles Van Tuyl), Bloomington, Indiana University Press.
 Knud Lundbæk, 1991, *Joseph de Prémare, Chinese Philology and Figurism*, Aarhus, Aarhus University

Press.

Oswald Ducrot et Jean-Marie Schaeffer, 1995, *Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, Seuil.

Pierre-Guillaume Pauthier, 1842, *Sinico-Egyptica. Essai sur l'origine et la formation similaire des écritures figuratives chinoise et égyptienne*, Paris, Imprimeur de l'Institut.

Virgile Pinot, 1932, *Documents inédits relatifs à la connaissance de la Chine en France de 1685 à 1740*, Paris, P. Geuthner.

—, 1971 [1932], *La Chine et la formation de l'esprit philosophique en France (1640–1740)*, Genève, Slatkine Reprints.

Jean-Pierre Abel-Rémusat, 1821a, « Sur les hiéroglyphes égyptiens », *Mélanges asiatiques*, t. 1, Paris, pp. 327–344.

—, 1821b, « Sur les caractères figuratifs qui ont servi de base à l'écriture chinoise », *Mélanges asiatiques*, t. 2, Paris, pp. 33–46.

—, 1857 [1822], *Elémens de la grammaire chinoise* (『漢文啓蒙』), Paris, Maisonneuve.

—, 1826, « Travaux des européens sur la grammaire et les élémens de la langue chinoise. Plan d'une introduction à l'étude de cette langue », *Mélanges asiatiques*, vol. 2, Paris, Dondey-Dupré, pp. 107–131.

Jean Rousseau et Denis Thouard, 1999, *Lettres édifiantes et curieuses sur la langue chinoise*, Lille, Septentrion.

Semaine internationale de synthèse, 1963, *L'écriture et la psychologie des peuples*, Paris, A. Colin.